

小林先生への質問

1. おしまいのところで「表象空間」の消失とありました。この消失する「空間」とは認識のためのもののでしょうか。あるいは、物理的な空間が消えてしまうのでしょうか。情報＝エネルギー＝質量であるとする、空間が消えて情報だけが残るとするのは想像しにくい事ですか。誰が、あるいは何がその情報を活用するのか、という疑問もあります。

(回答)

すみません、説明が行き届かなかったと思います。

わたしが言う表象空間とは、表象の空間つまり、西欧絵画の文脈では、透視図法によって規定されているような計算可能な表象の空間のことです。つまり、われわれがタブローを見て、そこに空間があると思うような表象された空間のことです。これが消失するということは、われわれは空間という錯視をもうもつことができないということです。

2. 精神分析のおはなしのところでに関して質問です。「自分の身にふりかかってきたであるにもかかわらず、一体それが何のことだったのか分からない（記憶にない）ということが、多くのひとにもある」ということをおっしゃっていたと思います。ことばとしてあらわそうとしても核心には触れられないままという状態と、何か関係があったりするのでしょうか。

(回答)

わたしが言った「自分の身に起こっていながら記憶にない」という状態は「言葉でいいえない」ということではなく、完全に、フロイト的に言えば、「抑圧」されているということです。抑圧、禁止、そのような機構にかかわります。「うまくいいえない」ということではありません。

3. 第1種、第2種表象不可能性の場合、それを「支配する」ためのテクネーとしての役割を表象が果たしていたが、第3種(?)表象不可能性(=情報?)の場合、それを統御するテクネーは存在すべきなのか、それが存在しうるとしたら、社会的なテクネー、政治的、倫理的ポイエーシスなのか、あるいは個人的身体的実践のようなものでしかないのか?

(回答)

この場合のテクネーは、当然、個人的身体的実践のようなものなのですが、しかしいわゆる「未開という文明」においては、これは、シャーマンあるいは魔術師というような「社会的に認知されているエキスパートによって担われていたと思います。つまり、「社会的テクネー」でもあるのです。社会的と個人的が分離していない共同性というものがあるということを知ることが大切で

す。

4. スライドの最後で言語の表象？について多分触れられようとしていたと思うのですが、ぜひ伺いたいです。

(回答)

はっきり覚えていませんが、ここで展開したイメージによる表象の問題をいかに言語の問題にスライドさせるのか、させないのか、という問題だったと思います。言語文化の場合は、たとえば小説空間のようなものが、わたしが語った表象の問題と密接にリンクすると思います。ご存知のように、フォーコーは、『ドン・キホーテ』をラス・メニナスとならんで論じていたはず。その空間が、ある意味では、現代において、「物語」によって置き換えられてしまっています。リアリズム小説の衰退。それをあらためて論じる必要がるはずです。

5. ロマン派以後の歌詞のない音楽、あるいは標題音楽ではない音楽。つまり絶対音楽（ベートーヴェン、ブラームス。ブルックナー等の器楽曲）は何かを表象できるとお考えでしょうか。言語を用いず、絵画のように形や色を用いない抽象的な芸術である音楽は表象のメディアでありうるのでしょうか。

(回答)

まさにロマン主義と音楽との深い関係がありました。そこでの鍵は、最終的には、感情という問題です。感情は、表象するものではなく、表現表出するものです。そこでベクトルがかわります。だが、もし世界そのものが、「感情」として現れたとしたらどうでしょうか？たとえば、嵐です。ワグナーの「さまよえるオランダ人」を思い出していただければいいかもしれません。このあたりが究極です。しかし、音楽はそこから、シェーンベルク／ウェーベルンの無調性への方向とドビュッシー的なまさに表象＝印象的な方向へと分裂するようにわたしには思えます。でもおもしろい問題なので、いつかみなさんと議論してみたいと思います。

太西先生への質問

1. ハイデガーとヘルダーリンにおける「宗教的なもの」の問い直しと近代の問い直し（あらかじめ崩れる近代）の関係をもう一度説明してほしいです。

(回答)

具体的にテクネー（技術・芸術）は時代的に変化しており、その革命的とも言える変化を無視することはできない。その意味で「モダン」は、これまでのかつてのモダン（最新のもの）とはまったく異なるモダンということになるろう。技術の変容を捨象して技術「一般」について問うことはできない。

時代・画期、エポック、エポケー、時代性・画期性（エポカリテ）をどの視点

から概観することができるのか、という問題もあるだろう。超越的な視点がありうるのかどうかという問いは、ハイデガーの、存在の「歴史」として哲学・形而上学をとらえる視点の適切さを巡る問いと関係するだろう。

2. モダンそのものの中にモダンを中断させる者が胚胎していた。そして、そのような図式は根源的ミュートス＝ミメーシス＝テクネーへの言及を通して、すでに古代ギリシアに存在していた。仮にそうだとする。しかし、そのような図式が切り出され、焦点化され、強調されてくる時代がまさに「モダン」「モデルニテ」であるとはいえないでしょうか。

(回答)

一方で、テクネーを言語に局限してみた場合、そのミメーシス的な側面（表象不可能性としての表象）や根源的エクリチュールという側面は、「最初から」、効果を及ぼす。たとえば、人々がいかに否認しようとも、あるいは、その否認の様々な身振りを通して効果を及ぼす（ちょうど、フロイトの死の欲動のようなものかもしれない）。

この「最初から」というのは、時代・時間的な始まりという意味ではないだろう。それは、非時間的な、かつ非場所的な意味で、すべての始まりとともに始まっている何か、あるいはすべてよりも先に始まり、あるいはすべての後にも作動し続けるような何かのことと言えるかもしれない。アナクロニックなもの、ユトピックなものとしてのテクネーのありかた、その無気味な性格はここに起因するのではないか

9. テクネー、言語に災厄を招く側面をみることも古代ギリシア以来のことだとして、その災厄に質・量の変化はないでしょうか？そして、その変化は、やはり「モダン」と関係ないでしょうか。

(回答)

時代画定を単純に許さない側面がテクネーにはある、ということを経験すると、われわれが表象する時代区分とは異なる考え方も必要なのかもしれない。

質疑応答に関する問い合わせ

九州大学大学院言語文化研究院

教授 阿尾安泰 ao@flc.kyushu-u.ac.jp